

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	その他指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている実践事例
-------	-----------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

神奈川県横浜市南区六ッ川2-138-4

○学校名

神奈川県立横浜南養護学校

○学校のURL

<http://www.y-minami-sh.pen-kanagawa.ed.jp>

2. 学校紹介

○学級数

【小学部】12学級 【中学部】7学級 【重心部門】6学級
【藤が丘学級】3学級 【高等部】2学級 ※平成24年11月1日現在

○児童生徒数

【全児童生徒数】101人（平成24年11月1日現在）
（内訳：小学部44人、中学部30人、重心部門15人、藤が丘学級7人、
高等部5人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

学校目標

- ・自分をつくる
- ・病気をくぐる
- ・世界にかかわる

○人権教育にかかる取組の全体概要

研究主題「特別支援学校（病弱）で学ぶこどもたちの人権」

本校は、常に100名前後の児童生徒が在籍しており、転入・転出が年間約400件の、病弱教育の特別支援学校としては規模の大きな学校です。また、こども医療センター内に入所・入院している児童生徒は病弱だけにとどまらず、肢体不自由、情緒障害、重度重複障害等多様です。したがって、指導形態も症状や障害の程度等に合わせて多様です。

このような環境の中で、「こどもたちが安心して過ごせる学校づくり」特に、「一人ひとりが大切にされる授業の実践」「互いのよさや可能性を認め合える仲間づくり」を観点に据え、「児童生徒の学習を保障する」「児童生徒の人権感覚を育てる」を本研究の目的とし、学部・部門・グループごとに研究実践を行いました。

3. 特色ある実践事例の内容

・取組のねらい、目的

小学部では、テレビ会議システムを用いた共同学習やクラス間の授業交流を行うことにより、新たな教育活動の展開を模索するとともに、そうした活動の中で集団への帰属意識や自己有用感を児童が持つことで、子どもたちの人権感覚を育てていこうと考えました。

・取組を始めたきっかけ

児童は入院・入所し、治療を続けながら学習しているために、様々な課題や制約があります。どのクラスも少人数や個別で学習しており、個のニーズに応じた指導がしやすいなどのメリットがある半面、集団で意見を交換する機会が限られており、帰属意識や自己有用感を持つことが難しい面もあります。前籍校へ復学する際、個別学習から急に大きな集団のクラスに入ることを不安に感じる生徒もいます。また、病棟内の学習室やベッドサイドの授業は、病棟へ持ち込むことができる教材に限られる等の制約があります。そこで、集団への帰属意識や自己有用感を児童が持つことや、困難な学習を可能にすることで子どもたちの人権感覚を育て、また学習も保障していこうと考えました。

・取組の内容

活動内容	学年	目的	留意事項
理科 生物とそのかんき ょう	6年 (7名)	・生物に対しての興味 や関心を持たせ、学習 意欲を高める	・児童同士の話し合い や意見交換がうまくい くように支援する
理科 流れる水のはたら き	4, 5年 (5名)	・土山を流れる水を観 察し、興味関心を引き 出し、学習意欲を高め る	・自発的な意見交換が できるように支援する
クラブ オリエンテーショ ン	3～6 年 (21 名)	・後期の所属を決める ・集団としての一体感 を味わい、帰属意識を 高める	・児童が主体的に取り 組めるように支援する
後期図書・広報委 員会 オリエンテーショ ン	4～6 年 (9名)	・後期の活動計画を立 てる ・友だちと一緒に学校 を支えていくという帰 属意識を高める	・取組内容に関して、 積極的に意見が出るよ うに支援する

・取組の主体や実施体制

小学部

A班	各クラス間の共同学習を通じた、特別支援学校（病弱）における教育活動の新たな展開
B班	自立活動における児童の機能回復の経過の変化

・取組の頻度

A班は、教室と病棟学習室を繋げる視聴覚・情報機器の整備や、取り上げる授業・単元の選択をして、4回実施しました。

4. 実践事例の実績、実施による効果



学習意欲の向上

【テレビ会議システム事例1】

- (1) 日時 平成23年9月12日(月) 5校時
- (2) 場所 6年教室、屋外
- (3) 対象児童 小学部 6年生7名
(1組 教室登校5名、2組 病棟内学習室登校2名)
- (4) 活動内容 理科(生物とそのかんきょう)
- (5) 本時の目標
 - ・テレビ会議システムを利用して、普段あまり交流のない、1組と2組の児童とがつながることで集団としての一体感を味わい、帰属意識を持ちながら学習意欲を高める。
 - ・ダンゴムシを捕まえて観察を行い、生物に対する興味や関心を高め、生物のつながりについて考える。
- (6) 留意点
 - ・話し合いの目的や順序などを児童に伝えながら授業を進めることで、児童同士の話し合いや意見交換が上手くできるように支援する。
 - ・WEBカメラやパソコンを持って移動することが多いため、移動の際には、電源コードを車椅子に引っかけたり、落としたりしないように注意する。
- (7) 本時のふりかえり

<児童の様子について>

- ・テレビ会議システムを使っでの授業は初めてだったので、とても興味を示していた。
- ・自己紹介の時は、お互いに緊張していたようで静かだったが、次第に打ち解け、画面を通じて会話のやり取りができていた。
- ・映像がフリーズした時には、音声だけでも相手に伝わるように、ダンゴムシの様子を詳しく説明したり、音声聞き取りにくくなったときは大きな声で発言したりと、相手側の児童を気遣って活動することができていた。
- ・1組児童の活動が中心で、2組児童は1組児童の活動の様子を見ているだけの時間が多くなってしまった。

<情報機器について>

- ・電源コード及び LAN ケーブルの長さが足りず、外を撮影することが殆どできなかった。
- ・WEB カメラを手で持っていたため、手ブレが多かった。
- ・映像が乱れたり、回線が途切れることが多く、その都度、授業が中断してしまった。
- ・パソコンの画面だと映像が小さく、見づらかった。
- ・音声や映像の状態が悪く、病棟児童に意見を聞くことができなかつたため、児童間の意見交換が上手く行われなかつた。

次回への改善点

- ・画面を通じての会話や意見交換をもっと楽しみながらできるように、児童に対しての問いかけや説明の仕方を児童相互間でできるように工夫する。
- ・2組児童も積極的に授業に参加できるように、映像の写し方や質問・話し合いの仕方など、2組児童を意識した授業の展開を考え、一緒に学習しているという意識を高める。
- ・児童の学習意欲や集中力が途切れないように、映像や音声に不備があっても授業を中断せずに続ける。
- ・映像や音声の不具合が多かつたので、WEB カメラの解像度を下げ、映像を定点で写したり、インターネット回線が混雑する時間帯を避けることで、映像の乱れや断線を少なくする。また、音声の遅れや音量を改善するために、PHS のスピーカー機能を利用する。



帰属意識を高める

【テレビ会議システム事例2】

- (1) 日時 平成23年11月7日(月) 6校時
- (2) 場所 6年教室
- (3) 対象児童 小学部 4～6年9名(1組 教室登校5名、2組病棟内学習室登校4名)
- (4) 活動内容 後期図書・広報委員会オリエンテーション
- (5) 本時の目標
 - ・お互いの名前と顔を覚え、自分も友だちと一緒に学校を支えていく一人であるという帰属意識のもとに委員会活動を進めていく。
 - ・後期の活動について、一人ひとりが積極的に考え計画を立てる。

(6) 留意点

- ・児童同士の交流を図るため、一人ひとりの顔が映り（映像）、名前がしっかり伝わるように（音声）カメラの位置や児童の動きに配慮する。
- ・図書、広報委員会の役割やこれまでの活動について伝え、児童から取り組みたい活動内容が積極的になるようにする。

(7) 本時のふりかえり

<児童の様子について>

- ・教室と病棟の児童がお互いに顔を見て自己紹介できたため、親しみを持つことができた。学校が各クラスのつながりで作られていることを実感し、図書広報委員の一員として、ともに委員会を進めていくという意識を持つことができた。
- ・これまでは1組（教室登校）の児童が決めた活動を行うという形だったが、2組（病棟内学習室登校）児童も活動計画を立てる段階からともに時間を共有し、一緒に委員会の役割を聞くことで、様々な意見を出し、委員会を構成する一員として積極的な気持ちを持つことができた。

<情報機器について>

- ・途中で映像が中断してしまうことはあったがPHSを使ってうまく音声を利用しやりとりを続けることができたため、あまり流れを切ることなく進めることができた。
- ・どの位置にカメラを固定するとどのくらいの範囲まで映すことができるということを事前に確認していたため、スムーズに進めることができた。
- ・1組教室では大型TVにパソコンの画面を映して行うことで、どの児童にも相手の様子がより見やすい状態で授業を進めることができた。

5. 実践事例についての評価

◇成果と課題

テレビ会議システムを用いることで、従来の授業形式では難しかった集団での学習が可能となった。共同学習を通して、普段は交流のない児童と意見交換などができ、集団への帰属意識を高めることができた。

理科の授業では、ネットワーク環境に課題があり、目標としていた双方向での交流は難しい面があったが、病棟ではできない実験や持ち込むことのできない動植物などを実際の映像を通して見ることができた。また、PHSの活用などによって意見交換や質問を受けながら授業を進めることができた。2組（病棟内学習室登校）児童は活動を見る時間が多くなったが、学習意欲を高めることができた。

クラブ活動のオリエンテーションでは、テレビ会議システムにより、お互いの顔が見える状態での交流になり、活動報告を真剣に聞くなど、積極的な態度が見られた。また、これまでのようにクラブ活動の係決めをそれぞれのクラスで独自に進めるのではなく、活動内容を理解した上で、共通のルールの中、係を決定することができた。

委員会活動の係決めでは、テレビ会議システムを使い、お互いに自己紹介をしてから後期の活動内容を話し合ったり、委員長などの役職選出が行われたりしたので、2組（病棟内学習室登校）の児童も積極的に役職に立候補する様子が見られた。

これらの共同学習を通して、普段は一緒に学習できない環境であっても、同じ学校の一員としての自覚が芽生え、帰属意識を高めることができた。

今後もいろいろな考え方や意見を共有し、児童同士がお互いに存在を意識しながら学習を進めることで協調性を培い、学習内容をより深めることができる授業の方法について検討していきたい。「自分はここにいる。」という帰属意識を高め、「自分にできることがある。」という自己有用感や自尊感情を向上させる活動に継続的に取り組んでいきたい。

違った場所で学習していても同じ学校の一員として、自分と仲間を大切にし、一人ひとりが学習などに取り組むことができるよう、今後も研究を継続していきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

神奈川県立横浜南養護学校

医療センターや病院に入院・入所する子どもたちの特別支援学校で、100名前後の児童生徒が在籍し、転入転出が年間300名を超える。このような環境の下で「特別支援学校（病弱）で学ぶ子どもたちの人権」を主題に掲げ、正面から特別支援学校の人権教育に取り組んだ実践事例である。「各クラスの共同学習を通じた特別支援学校（病弱）における教育活動の新たな展開」では、テレビ会議システムを使い、教室登校と病棟内学習室をつなぐ授業や話し合い活動を通して、「互いの名前と顔を覚え、自分も友達も一緒に学校を支えていく一人である」という帰属意識を育む活動が紹介され、先生方の真摯な取組の様子が伝わるものとなっている。『平成22年度・23年度 神奈川県特別支援学校人権教育研究校 研究報告書〈研究主題〉「特別支援学校（病弱）で学ぶ子どもたちの人権』は、特別支援学校における人権教育の在り方を示す資料となっている。